

## 市場経済を超えることはできるか

国立民族学博物館教授 小長谷 有紀

私は普段、モンゴルへ参りまして、お年寄りの話を聞くという仕事をしております。今日も聞いてみたい方々が結構たくさんいらっしゃいますが、お年寄りの話を聞くのが好きで、その趣味と実益を兼ねて仕事をしています。お年寄りから話を聞いてわかるのは、せいぜい 100 年くらいです。それは、やはりどのように文書が整備されていても、書類には残らない歴史というものがありますから、生活者の視点で歴史を記録しておく仕事をしております。

パネルディスカッションのコーディネーターでいらっしゃる沖先生は、千年持続学といって、1000 年の未来を考えたりする方ですが、私にはとてもそんなに長い視点の視野はありませんが、私自身がしている仕事については、1000 年残る仕事だけをしようと思っております。

普段そのように時間を遡る方の仕事をしておりますので、今日は水を中心にしながら、しかも遡るのではなく未来を考える、しかも明るく話すという、この3つをお題に据えられて、非常に苦しんでおります。

### ネパールの氷河が小さくなる理由

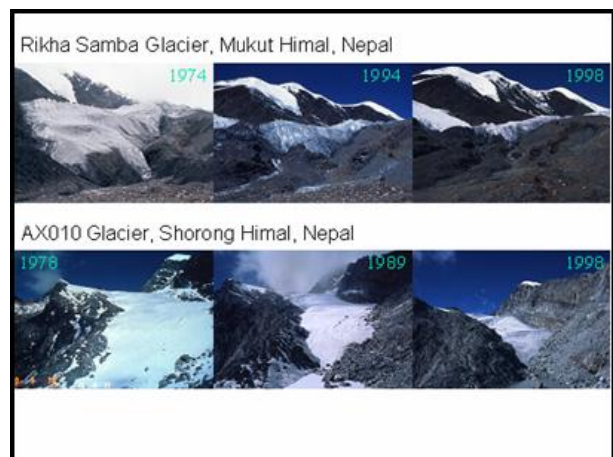
初めに温暖化というと、やはり乾燥地域にとっては氷河が溶けることが非常に大きな問題になります。そこで、雪氷学の中尾正義先生に氷河が縮んでいる写真をお願いしましたが、ついでに他にも色々なものを頂きましたので、私のわかる範囲で解説をさせて頂こうと思います。

これは1974年、まだ温暖化ということが言われる以前から調査をなさっていた訳です。その結果、非常にやはり縮んでいるということが

おわかりになると思います。これはネパールの氷河です。平均的に世界の氷河が縮まっていますが、このネパールの事例は、非常によく縮んでいる、小さくなっていることを示す図だそうです。

それではネパールやヒマラヤのように、アジアで氷河があるところは、温暖化がよそより酷いのでしょうか。ここでは25年の間に1℃くらい高くなっていますが、特に世界的に見てここだけが温かくなっているという訳ではないそうです。そうすると、氷河が他の地域よりも小さくなっているのは、どうしてでしょうか。この時に大事になるのが、ネパールやチベットの氷河では、気温が0℃から7℃くらいの幅の時に、どのくらいの温度で雪になるかということです。0℃の時は100%雪で降りますが、7℃くらいになったらほとんど雨で降ります。この雪と雨の割合が、このくらいの温度の幅で変わります。

6月から9月の間に雨が降るということは、結局これは我々が経験している雨の降り方と同じですね。モンスーンの雨の降り方になります。ここは高地なので、夏でも雪が降ります。夏の気温が高い時に降るので、その時の温度がちょっとでも上がれば、それは雪から雪ではなく雨の降り方になっ



てしまいます。つまり、冬雨タイプとはちがって、夏雨タイプですと、今よりも温度が 1℃上がった時に、雪ではなくて雨になってしまって、降ったとたんにもうそのまま氷河全体を溶かしてしまう、そういう危険性を帯びているということです。

また、そういう雪のところ、実は虫も住んでいるのです。氷河が黒く見えるのは、ここに生き物がいるらしいです。生き物がいると、氷河が黒くなって、黒くなれば熱をよく吸収します。雪は光を反射することによって、自分で溶けなくて済む訳ですが、黒くなって光を吸収してしまうと、どんどん溶けてしまいます。その虫が何故かわからないのですが、チベットやヒマラヤには非常にたくさんいるということです。このように、調べることは、まだまだあるそうです。

私自身がこうした資料を見て思ったことは、たしかに地球温暖化というのは、1つの症状な訳ですが、地球全体を1つの体と見立ててある種の病気にかかっている訳ですけれども、その症状の出方はそれぞれ部位によって違う、ということです。先程、世界全体の地図を広げてコンピューターで計算した症状の違いを江守先生が説明してくださいましたが、私のように地べたを這っている人たちの資料から見ても、その症状は非常に違う、ということです。

たとえば、雪や氷河が溶けることで、石や岩による自然のダムが出来ていて、そこにたくさん氷河が溶けるようになると、そのダムが決壊して、その下に住んでいる人達は、洪水の被害を受けることになります。氷河が解けることによって海面が上昇するだろうということは、小学生でも知っている温暖化の症状ですが、そうなる前に、現場ではもっと色々な症状を多様に示す訳ですね。

ダムが決壊して水に押し流されてしまう人達がいるかと思うと、たとえば、タクラマカン砂漠では降水量が少ないものですから、川の流れを涵養しているのは雨ではなく、むしろ氷河からの割合が高いのです。河川流量の 80%が氷河からの水になっていたときもあるほど、氷河の水に依存している訳です。そんな地域では、歴史的に、氷河の状態が、すなわち河川流量の差となり、町の位置まで変えてきた訳です。現在の町はここだけでも、昔はもっとこんなところまで川が流れていて、使いやすい場所だった、ということになります。

こういう地域では、今後水がたくさんある時とない時とでは、先程、温暖化によって自然変動が大きくなるだろうと仰っていましたが、そうした変動に合わせて町を移動させる訳にはいかないのが、既に出来ている制度や固定施設を使おうと思ったら、非常に困るだろう、ということが推測されます。

## 氷河が溶けても、川の水が減る理由

これは実は私自身も、この5年間くらい調査に行ってきた場所です。これは有名なスウェン・ヘディングが調査した時の 1927 年の動画の一部ですが、当時これだけ水があったのに、今はもう涸れてしまいました。有名なアラル海と同じように、ここにも消えてしまった湖があるのです。最近ちょっと河川に水を流すようになって復活してはいますが。

この地域は、祁連山という山脈にある氷河



によって潤されています。ここをシルクロードが通っていますが、シルクロードはこういう山の氷河からの水によってオアシスができていた地域を数珠つなぎにつないでいる訳です。こういう地域を潤している氷河は、確かに縮んでいます。氷河が縮んでいるということは、実は溶けているわけですから、水は以前にも増してたくさん流れて来ているのです。中流域では、最近になってたくさん水が流れて来ているにも関わらず、下流域のこの湖は無くなってしまった訳です。

これはどうしてでしょうか。実は、人が使ってしまったのです。上流のダムのある位置では、確かに水量は段々増えていますが、下流に流すところで計ってみると、一気に減っています。氷河が溶けることによって増えている水が、その増え方よりも大きな勢いで減ってしまっているのは、その分だけたくさん人が使ってしまった、ということなのです。

病の症状が多様だと申しましたが、単に氷河が溶けるということだけみても、大地に表れる症状は多様です。そして、人間の生活は、その症状をさらに多様にします。というのも、人はその症状に便乗することさえできてしまうからです。先程、鬼頭先生が、「気候の変動に、そのまま人の暮らしが対応している訳じゃない」ということを仰っていましたが、水の増加という症状から環境の危機を感じるどころか、「来る水は使っちゃえ」ということになる訳です。そのたくさん来ている水を使うことによって、中流域の人達はどんどん発展しますが、下流域の人は全然水が無くなってしまって、現在は強制移住させられている状態になっています。つまり人は便乗することさえ出来てしまうし、そうして便乗したことによって、違うところに住む他人に不幸を押し付けるということも出来る訳です。

このように環境問題というものは、地球全体で起こっていることは一つの流れですけれども、その症状は多様に違って、その多様性は自然現象がそうだというだけではなくて、そこにどのように人間が関わるかによって多様になるわけで、便乗させることも出来るし、そして便乗した人は、そうでない人に不幸を押し付けてしまう。別の地域の人に不幸を押し付けるということが、環境問題の最大の問題だと思います。全員が一致団結することは、なかなか出来ません。氷河縮小の影響は、地球全体にとってはよく言われますが、症状の多様性が、さらに手の痛みを足に移す。それはどっちにしても1つの体の中で起こっていることです。

## 遊牧民の暮らし

そういうことを前振りにおいたうえで、モンゴルについてお話したいと思います。

モンゴルの水資源の全体量は、日本とそんなに変わりません。こういう乾燥地域は元々降る水の量が少ないので、氷河の持っている水の意味は大きいだろうと思いますが、タリム盆地ほどは大きくなさそうです。

過去 100 年の水の歴史を見てみますと、やはり人がたくさん住むところで水道が作られたという、先程の鬼頭先生のお話と同じことが、世界の例に漏れることなくモンゴルでも起きています。もっぱら首都の話です。人口が 50 万

都市の上水道



人くらいの時にちょうどいいと思って作った施設をまだ使っていて、人口が 100 万人以上になっているので、都市的なインフラは、もうパンク状態になっています。

一方、地方は牧畜中心の世界です。遊牧の暮らしを発展させようとしたのですが、それを個人でではなく、集団化してやるようになり、たくさん井戸が掘られました。社会主義時代の開発は極端でしたので、井戸を掘る必要がないところにまでノルマがあつて、井戸をむりやり掘って使っていたようです。

そもそも移動する遊牧は遅れているとみなされていましたから、「もっと進んだ農業をやりたい」ということで、国営の農場がどんどん作られて、灌漑の畑が出来ました。畑の灌漑をするように、スプリンクラーなどの施設が作られましたが、これは社会主義が終わった時に、ほとんど放棄されました。国家的な投資が行われなくなったので、この辺は潰れております。しかし最近になって新しい機械を購入して、新しく農業経営をする人が出てまいりました。土地法が施行されて私有化が認められるようになったので、投資して自分のものにする。土地を利用して、生産を得て儲けるという仕事が認識されるようになったために、新しくまた畑の灌漑が始まっている状態です。

首都や農場などでは、比較的、集積的な投資がなされる一方で、草原ではさほど投資が集積的ではありません。地域によっては深井戸もありますが、人力で掘れるような井戸がほとんどで、この井戸で家畜の水をやっています。遊牧民の暮らしの環境は基本的に、集積型のインフラは未整備であり、分散型インフラも一旦整備されましたが、管理体制が崩壊してしまいましたので、今は不良だといえるでしょう。

そうすると、嫌でもインフラに頼らない暮らしが展開しております。例えばほとんど橋がないので、本当ならば雨が降っていない時にだけ



渡ります。しかし、私たち調査者は帰国日が決まっているので、どうしても渡りたいと頼みます。この時はゴビの出身の運転手さんだったので、「こんな川は見たことがないので、どうしても渡りたくない」と言っていたのですが、むりやり脅して渡って頂いているところです。こういう川べりで、人々は洗濯をしたり、お風呂とかはしないですから、水浴びを適当にしたりして、手を洗うにしても、水道などありませんから、自分で汲んでいます。この写真はちなみにキルギスです。遊牧民は、自分で綺麗な水源のところまで行って、水を汲んで来ます。遠ければ、牛の車で運びます。それから冬になると、氷とか雪を持って来て、それを自分で運んで溶かして、草が浮いていても、煮沸消毒もして顔を洗ったりしています。

## 環境問題とは何か

私は皆さんにお聞きしたいのです。こういう写真を見て、どう思うか、と。

「ああ、懐かしいな」と思う方がいらっしゃるかもしれません。そういう方は、ぜひモンゴルへご旅行に行ってくださいと思います。満足されることは間違いありません。一方、「ああ、遅れているな」と思った方もたくさんいらっしゃると思います。そういう方は、ぜひモンゴルへ行かないようにしてください。

行くと、いろんな面で不便で、イライラなさると思います。そういう方は、パリとかカナダへご旅行に行かれることをお勧めします。

そしてどちらにしても、「こんな写真を見せられたって、環境問題とは関係ないじゃないか」ということをたくさんの方が思われたと思います。私は、「それこそが環境問題じゃないですか」と言いたいですね。これを遅れていると思うにしても、懐かしいと思うにしても、それはどちらにしても、社会はどんどん開発されて行くことを私たちは無意識に前提にしていると思います。

先程、「日本の報告書で、“開発”という言葉が抜かれました」とありました。意図的に抜いているけれども、本当に開発しなくなった訳ではありません。例えば関西ではオール電化の家がものすごい勢いで増えています。普通の新築の家はオール電化していない家よりも、オール電化した家の方が多いう受注率です。それは、オール電化には補助がつくからです。「補助がつく」と言われたら、そっちに人が導かれるのは当たり前です。そういうかたちで、あんなに地球が熱々になるということが情報として明らかにわかっているにも関わらず、人はまだまだ便利な暮らしをやめられない訳です。

過去に人類は、「未来はどうなる」ということをコンピューターでシミュレーションしていなかったと思います。シミュレータがないから、「今の自分の考え方のままで行ったらやばいぞ」ということに気がつかず、便乗していたのだらうと思います。しかし、我々はもはや昔の人類とは違います。もっと賢く、技術が発達していて、未来を予測して、凶にしてははっきりと目で見ることが出来るにも関わらず、やっぱりやめられない。それは言い換えれば、ますます馬鹿になっているということではないかと思いますが、どうでしょうか。

## 100年後のモンゴル

モンゴルでは、ああ、無事に川を渡れるかしら、などと、ドキドキわくわくする水との関係が否応なしに維持されておりますが、この先はやはり開発される一方だと思えます。モンゴルではツーリストキャンプがたくさん立つようになっていきます。朝青龍のツーリストキャンプなどは、あのあたりで一番いいところで、それだけで十分なのに、実はこうしたテントの中で涼しい外気を楽しむのではなく、各テントにエアコンがついているのですよ。そういうふうには勢いよく開発されていってます。

今日のお題は100年後の日本を考えなくてはいけないのですが、私は100年後のモンゴルを考えてしまいました。モンゴル人とモンゴル国の未来は、基本的に私は別だろーと思ってます。首都のウランバートルには国の人口230万人のほとんど半分が、この1点に集中しています。1点に集中しているために、ここの環境汚染は相当なものです。ですが能力がある人は、こんなところに執着せずに、日本や世界に就職していらっしやいます。だからモンゴル人の未来自身を私は心配する必要はないと思っています。

しかし、国土保全という点では、それは大変に大きな問題です。この首都1点が非常に汚れることもそうですが、もっと全体の自然環境ももはや維持できないだらうと思っています。それはやはり人間の思想の問題があるからです。「定着するのがいい」「農業をするのがいい」「遊牧は遅れている」という考え方が、まだまだ主流なのです。そのような過去形の発展思想が絶滅しない限り、自然環境の保全は不可能であらうと思えます。

たとえば、社会主義時代に農業開発をして、それで放棄された畑の跡に行くと、ヨモギの系の雑

草があります。これは現在のリモート・センシングの技術から見ると、緑になります。また植物学者のなかには「こんなでも生えていれば、黄砂が飛来しないから、生えていないよりもこの方がいい」という人もいます。砂漠から黄砂が飛ばないようにするためには、この雑草だって生えている方がマシという処方箋を出している研究者もいるくらいです。だけど、この植物はアレルギー源です。日本の杉花粉のように、これは将来のモンゴルに災いをもたらすだろうと思います。人体に影響を及ぼすし、これが国境を越えて飛んできて困るだろうと思います。そんな植物が生えてしまったのは、農業開発による後遺症です。

開発によって、後でしっぺ返しがある訳です。元々乾燥地域の草原の生産力は年変動が激しいです。生えている時もあれば、生えていない時もある。それが降水量の変動に応じている植物のふるまいです。そして遊牧とは、それらが生えているところに行きますから、移動することによって、植生に合わせる暮らしをしてきた訳です。ところが移動しない暮らしをするということは、牧畜を定住するにしても、農業をするにしても、ずっとある一定の圧力をかけますから、環境が悪くなった時に、悪さにあわせて圧力を小さくすることが出来ない。そのことが何年も何年も続いてしまって、どんどん全体的な環境の悪化、草原の劣化につながって来た訳です。

### 市場経済によって変わった距離の意味

ですから遊牧の世界において、距離は環境保全のために必要だったことになります。悪くなれば逃げるという距離ですね。それは自然環境に適応するだけでなく、社会環境にも適応する手段でした。戦争になったら、戦争のないところへ行く。災害になったら、災害のないところへ行く。遊牧社会の中で存在していた距離の意味は、環境にあわせて、環境を保全するうえで、非常に必要な要素だったのです。

ところが現在、市場経済に移行しますと、その距離の持っている意味がまったく変わってしまって、単にコストのかかるものと考えられるようになってきます。たくさんの距離を越えて行けば、そこまで運んだ分、物の値段は高くなるし、遠くから運んできた羊は近くにいた羊よりも高くなるから売れにくくなる訳です。市場経済では、距離は価格に直接反映して、不利なものになっていくのです。

市場からの距離とメスの比率を計算すると、県単位でメスがどれだけいるかが分かります。世界的には家畜の群れはほとんどメスです。メスが飼われているのであって、オスはたいてい殺されています。子羊の料理というのは、実はほとんどオスを食べているのです。種オスだけいけば十分なので、それ以外のオスは、普通は食べてしまいます。しかし、モンゴルの草原は豊かなので、殺さずに大きくなるまで育てます。ただし、種オスとして全部育てると、メスを取り合うので、去勢して維持する訳です。そして、去勢されたオスが、乗る馬であるとか、車を引っ張る牛であり、すなわち軍事力になる訳です。だからモンゴル高原で展開して来た家畜の群れは、オスがたくさん生き残っているのが特徴で、メスの割合は世界的に見て低いです。

そんな低い中でも、とりわけ低いのが地方です。地方ではオスがたくさん生き残っているから、メスの割合が小さくなります。けれども、ウランバートルとか市場が近いところ、売り出せるような町があるようなところでは、メスの比率が高くなります。つまりオスが売れているということです。食べる人がいるからオスが売れて、メスの割合が高くなっているのが都市部です。一方、37%くらいしかメスがいない

という数字は、世界に稀な数値です。なんと群れの7割ものオスがいるということです。人に食われもせずブラブラ生きている。そういうところはやはり、市場とつながっていないわけで、結局そういうところが、電灯の普及率が低いところということになります。市場とつながっていないところというのは、まだ電灯も普及していないような暮らしぶりになってしまっている実態です。

それならモンゴルはどうしたらいいのでしょうか。

「市場経済とつながることに意味があるのか」という問いに対して、利益を目的とした活動をする、どうしても距離がコストに反映されてしまいますから、難しい。開発を目一杯することで、環境保全ができなくなってしまう。環境を保全していた時の距離の持っている内在的な意味を担保しながら、その距離を市場経済の論理の中に入れてしまわないようにするためには、NPOのようなかたちで、人々がつながっていく必要があるだろうと思います。

NPOという言い方は新しいけれども、“お布施の論理”とか言えば、これは昔からしていた訳ですよ。しかも、日本だけじゃなくて世界中で、寄付ということはあった訳です。イスラム世界でも喜捨は非常に大事な行為ですし、どんな社会でもお金だけが物差しにならない理屈があった訳です。だから環境保全型経済を進めようと思ったら、そういうことをこれからどんどん皆で考えていかなければいけないだろう、とモンゴルの距離を思うたびに考えてしまいます。

もう一つは技術に頼らない環境問題の解決ということも必要だと思います。なぜならば、コンピューターでどんなに計算して、あんなにはっきりわかってもやめないということが現実にある以上、別のものさしで考えていかななくてはいけないと思う訳です。

目前に危機があることについて、私はあながち悪いことではないだろう、と思っています。危機があれば考えますから、それがきっかけになって、普通だったら忘れてしまうようなお年寄りの話にも価値が出てきます。「昔ここは旭丘じゃなかった、そこについていた地名は、実は非常に鉄砲水が出る危険がある場所だったことは地名に残されていた」などという、人類が頭の中に残して来た伝承的な知恵も、こうした危機をきっかけに再評価されて発掘されて、それらを無形文化財というかたちで残していけるなら、「ちょっとだけなら暑くなってもいいぞ」というのが私の今日の発表の締めくくりです。

ご清聴ありがとうございました。